《論文》

芥川龍之介の『聊斎志異』受容と不思議な「中国物」

張　倩

要旨 : 小論は『聊斎志異』から芥川龍之介の「仙人」(1915 年)、「酒虫」(1916 年)、「首が落ちた話」(1917 年) という三つの「中国物」への翻案についての試論である。原作『聊斎志異』と芥川龍之介の三つの翻案作品を比較し、翻案作品の主人公の職業身分の変容、及び主人公の人間関係の変容に焦点を当て、その受容及び変容について整理し並びに芥川龍之介文学の創造性を探ってみるものである。

キーワード : 聊斎志異　芥川龍之介　中国物　受容　変容

一、『聊斎志異』から芥川龍之介の三つの「中国物」の受容

『聊斎志異』は中国の清の蒲松齢によって書かれる奇談や超自然物を扱う「怪奇小説集」であり、日本文学に深い影響を与えていた作品[1]でもある。その影響を受け、芥川龍之介は『聊斎志異』から創作の素材やテーマを得て、1915 年「仙人」、1916 年「酒虫」、1917 年「首が落ちた話」という三つの「中国物」を世に送り出した。「仙人」が「鼠戯」と「雨銭」からの翻案作品で、「酒虫」が原題のまま「酒虫」の翻案作品で、「首が落ちた話」が「諸城某甲」の翻案作品だと思われる[2]。

芥川龍之介の三つの「中国物」が『聊斎志異』の翻案作品として受容の結果、原作から何を保持し継承しているのか確認しておく。

（一）源泉としての『聊斎志異』

文学の翻案作品は一般的に前人の作品から大体の筋・内容を借りて趣意を言いかえ作りかえることをさすが、文学の影響関係下にある作品でも言える。影響の源泉としての『聊斎志異』は前述のように日本の多くの文学者に

愛読され翻案されている事情から見て、その作品の時代性、社会性を見逃してはいけないものであろう。多くの研究者は『聊斎志異』の主題について次のように指摘している。神怪や鬼狐などを取り扱った「怪異談」のように見えるが、「簡単に笑い飛ばしてしまえるような物ではない」[3]。作品には作者蒲松齢自分自身の不遇[4]、圧迫される社会的弱者への同情や憤慨[5]、偽・悪・醜への批判[6]、人々が復讐や愛情や懲戒のために異化したこと[7]、勧善懲悪の教育理念[8]、商業を重視する精神[9]、儒教と仏教と道教との合一[10]、宗教多元主義[11]、人間と動物との共存[12]など様々な主題も含まれている。また『聊斎志異』材料の多様性やバラエティーに富む主題によって、「六朝怪異譚の現実的な性格と、唐代伝奇の虚構的性格とを併せ備え、変幻自在、現実と空想とのみごとな統一は、アラビアンナイトにも比せられる傑作である」[13]と評価されている。

『聊斎志異』の多種多様な材料や主題から、芥川龍之介が取捨選択し、「鼠戯」、「雨銭」、「酒虫」、「諸城某甲」を翻案の源泉としていくつかの作品を創出した。以下まず『聊斎志異』原作の粗筋を確認しておく。

「鼠戯」は鼠芝居の商売をして稼ぐ者が十余匹の鼠を飼い、鼠が小さな舞台に登って人間のように立って舞い、男女の悲歓の様子を演じている。「歌聲甫動，則有鼠自囊中出，蒙假面，被小裝服，自背登樓，人立而舞。男女悲歡，悉合劇中關目。」（歌声につれて、鼠は嚢中より出て来て、仮面を蒙り、衣装を着けて舞台に登場し、立って踊り。男女悲歓のさま悉く劇中の関目に合える）という。

「雨銭」は「秀才」という優れた学問や才能の持ち主である人が狐より仙人になった老人との話である。秀才が故養真という老人に慕われ、訪れられた。老人の広い知識や、中国の古典経書の解釈に深い見地があることに敬服していた秀才が学問の一線を超えて金銭の助けを老人に頼んだ。老人が秀才をつれて密室の中に入り、呪文をとなえ、秀才を満足させるお金を降らせたが、結局最後にまたお金を消してしまった。腹立った秀才を見て老人は「我本與君文字交，不謀與君作賊」（わしは君と学問文章の交わりをするもので、賊のようなことをしたくない）と怒鳴りつけて去っていった。以上の二作は

芥川龍之介の「仙人」に変貌していくものである。

「酒虫」の主人公は長山の劉氏で、太った大酒呑で、そこそこの富豪である。ある日異国の僧が劉氏を見て「体に奇病があり、酒の虫がいる」と言う。劉氏は僧の言葉に驚いて治療法を尋ねると、日向に俯けに寝かして手足を縛り、首から半尺ばかり離れたところに、器に一杯良い酒を置いただけだと治療法を教えた。劉氏はそのように我慢していると、何かが下に置いてある酒の中に飛び込んだ。それは赤い酒の虫だ。劉氏は感謝して、お礼に金を出したいが、僧は受け取らず、虫だけもらって去っていった。その後劉氏は、酒を飲まなくなったが、体がだんだんやせていき、家もまた日ましに貧しくなって、ついには日々の飲食にも窮するようになったという。芥川龍之介はこの作品から同名の「酒虫」を作った。原作には作者が結末に次のような問題意識を示した。「日盡一石，無損其富，不飲一斗，適以益貧，豈飲啄固有數乎。或言『蟲是劉之福，非劉之病，僧愚之以成其術。』然歟否歟」（日に一石を消費しても、其の富を損なうことがなかった。虫が出た後には一斗の酒を飲まなくなったのに、ますます貧乏になった。いったい飲食には、もともと定まった數量があるのだろうか。或る人は言う「虫は劉の福だった、劉の病気ではなかった、僧が彼を愚かとして其の術を行い騙したのだ。」そのとおりなのか、違うのか）。

「諸城某甲」の主人公の某甲は各地を渡り歩く盗賊である「流寇」に遭遇して斬り殺され、首が胸の前に垂れていた。家の人が死体を担いで葬ろうとしたところ、息の音がほそぼそと聞こえた。家に連れて行き半年ほどでとうとう命を取り戻し治った。それから十余年たって、ある日、人と話し合っていた時、ひどくおかしい話をきいて大笑いした。その瞬間で某甲は頭が落ちて、息が絶えてしまった。作者は作品の最後に次のように論じている。「一笑頭落，此千古第一大笑也。頭連一線而不死，直待十年後成一笑獄，豈非二三鄰人，負債前生者耶！」（笑って頭が落ちるとは、これぞ千古第一の大笑である。頸が糸一筋ほどつながっていたが死なず、そのまま十年の後を待ち、一笑させた人との訴訟沙汰をひきおこした。これは笑わせた二、三の隣人が前世で債を負っていたのかもしれぬ）。

以上の四つの作品はいずれも簡潔な文言で綴られた短編小説であるが、「簡潔な文章のかもす余韻の中で、読者のイメージに委ね、ニュアンスを汲みとらせるという効果をもつ」[14]と評価されている。また現実にありえないような出来事であるが、「後味が悪くない」[15]とも論じられている。

「鼠戯」では「男女悲欢，悉合剧中关目」として社会の世相を反映している。「雨銭」では「与君文字交，不谋与君作贼」という正に聊斎志異の作者蒲松齢の高潔な文人気質、俗世に対する批判意識を表している。「酒虫」は「日盡一石，無損其富；不飲一斗，適以益貧」という作者の自然観、貧富損得観を表している。「諸城某甲」では「頭連一線而不死，直待十年後成一笑獄」という不思議な怪談に福禍相関的な思想を示している。このような蒲松齢の主題は芥川龍之介が如何に利用したのか興味深いものである。

（二）翻案としての「中国物」

芥川龍之介は『聊斎志異』の社会性、批判性を重視して文学創作の源泉としていた。『聊斎志異』の作者及び作品について芥川は次のように認識していた。「作者蒲松齢が、満洲朝廷に潔からざるの余り、牛鬼蛇神の譚に託して、宮掖の隠微を諷したるは、往々本邦の読者の為に、看過せらるるの憾みなきに非ず。……支那に留仙の聊斎志異あり。共に山精野鬼を借りて、乱臣賊子を罵殺せんとす」[16]。『聊斎志異』は度々芥川龍之介の文学創作の源泉となっていた。以上触れていた『聊斎志異』の四つの怪異談も芥川によって、原作を踏まえたうえで、再び創作し、中国発祥の話として一種の「中国物」を創り出した。芥川龍之介は『聊斎志異』中の作品を源泉として創作したものは、原作の題名をそのまま踏襲する場合もあり、題名を改変するものもある。また複数話を一つにまとめて利用する場合もあり、一話対一話で対応して創作したものもある。

芥川龍之介の「仙人」（1915 年）が北支那の市を渡って歩く野天の見せ物師「李小二」という男の話である。鼠芝居の商売をする李小二はある雨の日、雨宿りで山神廟に入った。廟の中に、紙銭の積んである所から道服を着ている見苦しい老人は現れた。李小二が濡れた老人に同情の気持ちを持っ

ていて、生活難や暮らしの苦しさを誇張して話したり、今年の災害を話題にしたりした。李の同情に気づいた老人は自分が金に不自由をしない人間で、「道」を学んだ者だと自己紹介した。道士はかき集めた紙銭を両手で床からすくい上げて、まき散らし始めた。撒かれた紙銭は無数の金銭や銀銭に変わり、李小二は金持ちになった。

「酒虫」は支那の長山にいる「劉大成」という男の話である。劉大成は屈指の素封家の一人で、飲兵衛だ。ある日、同じ飲み仲間の孫先生と一緒にいる時、西域から来た僧は訪ねてきて、劉に珍しい病気にかかっていると言った。それを聞いた劉は僧の治療を受けようとし、裸になって細引きでぐるぐる巻きにされ、日向にじっとしていた。と同時に、酒を入れた素焼の瓶を劉の枕もとにおいて、暑さと喉の渇きに我慢していた劉の喉から虫が出てきた。それ以後劉は酒が嫌いになって、健康が衰えてきて、家産も傾いた。

「首が落ちた話」は支那のある街の剃頭店の主人だった「何小二」という男の話である。何小二は、日清戦争に出征し、屢々勲功を顕したる勇士だった。日清戦争の中、馬に乗っていた何小二は敵の日本騎兵と出あって、首が日本軍の騎兵に斬られたのである。日本軍の野戦病院に収容され、治された。凱旋後とかく素行修まらず、酒と女とに身を持崩していたが、ある日、某酒楼にて飲み仲間の誰彼と口論し、遂に掴み合いの喧嘩となった末、頸部に重傷を負い即刻絶命した。

以上のような粗筋から見ると、「仙人」は主として「鼠戯」と「雨銭」との組み合わせで、「鼠戯」から鼠芝居商売や、鼠が人間のように立って舞いることを採り入れ、「雨銭」から金を雨のように降らせるシーンを受け入れた。一方「酒虫」と「首が落ちた話」は原作「酒虫」と「諸城某甲」の素材をそのままに取り込んで、内容を倍増させ作品を豊かにしたものである。

二、『聊斎志異』からの変容

『聊斎志異』の四つの作品と芥川龍之介の三つの「中国物」を比較して、芥川龍之介の変容について、中国の研究者は次のようないくつかの指摘があ

る。芥川龍之介が原作をそのまま借りて、芸術性を加えた[17]。新奇怪異の雰囲気の上に、原作を下敷きにしながら、複雑な心理描写、出来事の時代背景、もっと繊細かつ真実な筋を書き入れた[18]。作品の構造、人物の設定、創作の目的などの変容[19]や、豊かな細部の描写、人物イメージと主題の変容がある[20]。

本稿は原作『聊斎志異』の作中の主人公の職業が如何に芥川の「中国物」に移行していくのか、また原作の主人公と芥川の「中国物」と比較して主人公に関わる人間関係が如何に変動しているのかを中心に、芥川龍之介の三つの「中国物」の変容を考察してみる。

（一）秀才に代わって鼠芝居人

芥川龍之介の「仙人」は主として『聊斎志異』の「鼠戯」と「雨銭」から人物構成と内容構成を受容した。「鼠戯」の主人公は「長安の市内で鼠芝居をやって金をとっている」もので、商売人である。「鼠戯」（鼠芝居）という雑芸は1500年前中国の東晋時代に始まり、当時「老鼠推磨」（鼠にひき臼を回させること）や「老鼠荡秋千」（鼠にブランコを漕がせること）などの鼠遊びをしていた。清の時代になると、鼠戯が庶民の間に広まった。シンプルで簡単に行われる鼠戯は、お祭りの娯楽となり、貧しい商売人の稼ぐ手段となった[21]。つまり「鼠戯」は昔の中国にあった貧乏人の商売で、大衆の日常生活における娯楽である。鼠戯の内容について、勧善懲悪、忠孝提唱を中心として展開されるものが多かった[22]。雑芸の商売人が鼠を訓練し、人間社会の出来事を鼠芝居に取り入れて、見物人の娯楽としたり「勧善懲悪、忠孝提唱」の主題を伝えたりしていたのである。一方「雨銭」は原作の蒲松齢は堕落した俗人の「秀才」を戒める意味がかなり含まれている作品である。優れた学問や才能の持ち主である読書人が結局金銭欲で学者の一線を超えて狐より仙人になった老人に金銭欲を示したが、老人に軽蔑され結局一銭ももらえなかったという構成である。芥川はこのような「読書人」非難の描写を避けるために、代わりに主人公を鼠芝居人にして設定している。

芥川の「仙人」は原作『聊斎志異』「雨銭」の主人公で、読書人である

「秀才」を作中には入れないで、代わりに「己は鼠に芝居をさせて、飯を食っている」という「鼠戯」の主人公のイメージで「李小二」という架空だが、中国人にはよくある名前の主人公を作った。「北支那の市から市を渡って歩く野天の見せ物師に、李小二と云う男があった。鼠に芝居をさせるのを商売している男」に変身した。李小二の職業は当時の中国においてはよく見られたものであるが、芥川の作品に出た道士は「それはまたお珍しい」と言って、原作の中国にあった実在職業から日本の芥川龍之介にとっては「珍しい」職業として扱われた。

原作の鼠芝居人は作中不平不満などこぼすことなく、芝居人は男女の喜び悲しみの台詞を歌い、鼠がそのセリフにぴったりの踊りを披露するというものであった。しかし、芥川作になると、元々李小二は嚢一つ、笥一つ、小さな屋台のような物一つしか持っていない貧乏人だったと表現し、鼠芝居の商売をして稼ぐのは決して容易なものではないので、生きてゆく苦しみを不当だと李小二は思っているという。芥川龍之介は李小二の心情を作中で次のように説明している。「その苦しみを与えるものを――それが何だか、李にはわからないが――無意識ながら憎んでいる。事によると、李が何にでも持っている、漠然とした反抗的な心もちは、この無意識の憎しみが、原因になっているのかも知れない」という芥川龍之介の社会批判とも読みとれるセリフとなっている。

李小二は人生の苦しみを反抗しようと思っていた。人に苦しませる原因を無意識に憎んで、反抗的な心持ちを持っていた。芥川は作中に「すべての東洋人のように、運命の前には、比較的屈従を意としていない」という。李小二に人生の転機を与えた。原作「雨銭」に泥棒としての「梁上の君子」が不義の手を出して批判されたが、それとは違い、芥川は李小二の道士との出会いを描き、社会批判的な人が希望の見えた裕福の人生を得られたことに結末をつけたのである。

（二）富豪で「打麦場」の主人と孫先生

『酒虫』の原作では、主人公のことを次のように描いている。「長山劉氏,

體肥嗜飲。每獨酌輒盡一甕。負郭田三百畝，輒半種黍。而家豪富，不以飲為累也。」（長山の劉氏は、体は肥満飲酒を好んだ。獨りで酒を酌み、毎回一甕を飲みつくした。郭の田は三百畝あり、いつでも、半分には黍を植えた。けれども家は富豪だったので、このように飲んでも影響はでなかった）。

この作品について、芥川龍之介が「酒虫は材料を聊斎志異からとつた。原の話と殆変つた所はない」[23]と示している。しかし人物設定から趣旨まで多くの変異点が見られる。両作の主人公の職業・身分について、原作は酒飲みだが酔うことのない富豪の劉氏としている。芥川は劉大成といういかにも大きく成功している雰囲気の名前を与えている。また城外に三百畝もの土地をもっていることに、打麦場の主人ともなった。「打麦場」とは「刈り取った麦の穂を打ち、脱穀する作業を行なう場所」[24]である。芥川はいかにも中国らしい雰囲気の語彙を使用し、中国という臨場感を作った。芥川は恐らく幼いころから熟読した『水滸伝』で「打麦場」という言葉と出会い、記憶していたと思われる[25]。原作にはいない劉大成の飲仲間孫先生（儒者）と召使いも設定された。これによって物語の展開がさらに立体的になり、中国の当時の読書人（儒者）に対する芥川の論も展開できるようになったのである。

（三）「流寇」に斬られた者から日清戦争の兵士へ

原作「諸城某甲」の主人公は山東省諸城県の某甲と設定され、「流寇」に出会って斬り殺された。「流寇」とは住所の定まらない盗賊であるが、増田渉らが『聊斎志異』を訳したとき、流賊は「明の末の叛徒李自成・張献忠らの徒党」[26]を指すとして、原作の蒲松齢がこの名称を使うことにより、李自成・張献忠が指導した農民反乱に対する態度がうかがえるという。この推定の当否は別にして、芥川龍之介の「首が落ちた話」の主人公は、街の剃頭店主人の何小二と設定し、日清戦争に出征させ日本軍に斬られたというものである。この「屡々勲功を顕したる勇士だったが、凱旋後とかく素行収まらず、酒と女と身を持ち崩して、無頼漢になった」とした。

作品中に芥川龍之介は日清戦争に参戦していた木村少佐の感銘深い話を引き出した。「我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知って置く必要

がある。実際それを知っているもののみが、幾分でもあてになるのだ。そうしないと、何小二の首が落ちたように、我々の人格も、いつどんな時首が落ちるかわからない。」そしてこの何小二の首落ちた話を載せた中国の新聞の「言外の意」が分かったように結論をつけた。「すべて支那の新聞と云うものは、こんな風に読まなくてはいけないのだ。」という。

芥川龍之介の「首落ちた話」は大正六年に発表したもので、時の 1917 年には第一次世界大戦の中、戦争時 1914 年（大正三年）大日本帝国陸軍は、ドイツ東洋艦隊の根拠地だった中華民国山東省の租借地である青島と膠州湾の要塞を攻略した。青島攻略後の 1915 年 1 月 18 日、日本は中華民国の袁世凱政権に「対華 21 カ条要求」を提示し、ドイツ帝国が山東省に持っていた権益を大日本帝国が継承することなどを要求し、中国世論は大きく反発していたという背景に以上の「首の落ちた話」の会話が展開していたのである。この会話の設定により、『聊斎志異』の翻案、変容から大きく延伸して、芥川龍之介の時勢批判へと繋がった。

（四）「人間の苦境」から「仙人・凡人の苦境」へ

「鼠戯」の主人公は独りぼっちで、十余匹の鼠を飼っただけの人間である。動物の鼠に芝居をさせるのは容易なことではないので、中国の明の時代の文人が「長安の乞食は犬劇、猿劇、そして近くに鼠戯をする。鼠は頑固で、教えるものじゃないが、どうしてそれほどできるのかは分からない」と疑問の念を抱いた[27]。しかし、『聊斎志異』の中で、「仮面をかぶって小さな衣装をきた鼠が袋の中からでてきて、男の背中から舞台の上に登り、人間のように立って舞ったが、男女の区別や喜び悲しみのこなしが、なにからなにまで芝居の筋にぴったり合っていた」という表現である。動物の鼠を舞台で人間のように芝居を演じさせ、喜怒哀楽を振舞わせ、人生の劇・人間の苦境を演じさせるのである。

芥川の「仙人」の李小二は現在独りぼっちだが、五匹の鼠に李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方の知れない二人の子の名をつけて李小二と鼠との関係を家族関係と譬え、さらに主人公と鼠との位置関係については、

芥川は次のように設定する。「どうせ生きているからには、苦しいのはあたり前だと思え。それも、鼠よりは、いくら人間の方が、苦しいか知れないぞ……」「己は鼠に芝居をさせて、飯を食っていると思っている。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食っているのかもしれない。」人間の苦と鼠の苦との比べ、人が鼠に芝居させ商売させるのか、それとも鼠が人に商売させるのかなどと考えさせ、究極の所、人が家族に頼って生きるのか、それとも家族がその人に頼って生きるのかというまるで作者芥川龍之介の自問自答のような問題関心が示されていた。

李小二と道士との関係が出会った最初と結末とは大きく変化した。最初紙銭の中から、老人が現れた。李小二は見苦しい老人が乞食だと思ったので、同情の気持ちを動かしながら、声をかけて、天気や商売のことを話した。二人の間には、会話が少しずつ交換されるようになった。老人が紙銭の中から出て来て、李と一緒に、入口の石段の上に腰を下した。その時に李は老人と対等で、いろいろな話をした。老道士に対して、李は自分のほうが生活上の優者だと考えて、この老人に対して済まないような心持ちを持っていた。そこで、李は生活難や、自分暮しの苦しさをわざわざ誇張して話した。道士は、顔を李と反対の方に向けて、廟外をながめるが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならなかった。李は自分の同情が伝えられなかったことについて不満を持っていた。次の話題は今年の秋の蝗災である。作中に「この地方の蒙った惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャスティファイしてやりたいと思ったのである。」という。このひたすら納得させ、正当化しようとする主人公に対して、老人は自分が金には不自由をしない人間なので、逆に李の暮しを助けてもいいと言った。李はショックを受けて「五感を失った人のように、茫然として、廟の中へ這いこんだ。両手を鼠の糞と埃との多い床の上について、平伏するような形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めているのである。」と急変した。この時李小二は鼠に変身され、鼠のように鼠の糞と埃との多い床の上にひれふした。道士はかき集めた紙銭を両手で床からすくい上げ、掌でもみ合せながら、足下へ撒きちらし始めた。撒かれた紙銭は無数の金銭や銀銭に変った。李小二は、雨

銭の中、床に這ったまま、ぼんやり老道士の顔を見上げていた。このような描写によって、金銭的な面において「道士が上、李小二が下」という最初出会った時とは違う関係に変わってきたのである。

芥川の「仙人」では、仙人としての道士は苦楽や死生がなくて、無聊な生活を送っているので、人間生活を懐かしく思って、わざわざ苦を探しているのである。だが人間の李小二はいつも商売や生活を心配しているし、お金の不自由のない生活、つまり道士のような生活を憧れている。それに対して、仙人でも凡人でも悩みがあり、お互いに羨むだけだということを、芥川の作品から読みとれる。

作中に「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚だ、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」という芥川の苦楽観、生死観を示している。また『聊斎志異』とは違う仙人の下界に来る理由について、芥川の独特の解釈が示されている。「恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなって、わざわざ、苦しい事を、探してあるいていたのであろう」という。原作の「鼠戯」と「雨銭」が人間の苦境を表したことに対して、芥川龍之介の「仙人」が仙人・凡人ともに苦境にあることを示した。

（五）天命と忍耐

『聊斎志異』の「酒虫」の中に、主人公劉氏と酒虫との関係、劉氏と異国の僧との関係、酒虫と僧との関係を注目してみると、劉氏は体の中に酒虫がいるから、いつも酔わなかったのだ。しかし酒虫について、劉氏が全然意識していなかった。異国の僧の目から見れば、「いくら飲んでも酔わないのは病気だ、酒虫が奇病の原因だ、治療してあげる」という。ところが、酒虫が劉氏の身体から取られた後、すぐに「酒の精」になって、僧に取られてしまったのである。同じ酒虫なのに、病気の元である一方、良い酒ができる酒の精でもある。

酒虫を取られた以来、劉氏は酒を仇のように憎んだ。そして体がだんだんやせていき、家もまた日ましに貧しくなり、ついには日々の飲食にも窮す

るようになった。これについて原作の『聊斎志異』では次のように論じる。「飲食に天のさだめた運命があることによるのであろうか？あるいは、虫は劉氏の福であって、病いではなかったのに、僧がその術をもって愚弄したのである」という。また、原作「酒虫」の「天命説」について以下の二点も考えられる。第一、劉氏がいくら飲んでも酔わないのは天から与えられた運命で、「天命」である。あるいは酒虫が元来劉氏の体の一部であり、劉氏そのものの譬えでもある。だが劉氏が異国の僧の言葉を信じ、天命に逆らって、自分の生まれつきの体質、身体や運命を変えようとした。結果として、「天命に逆らうことはできない」の通り、劉氏が痩せていき、貧しくなった。第二、酒虫が体にいた時に、劉氏がでぶで、城外に三百畝もの土地を持っている富豪だった。酒虫がいないと、劉氏が痩せていき、貧乏人になった。というのは、酒虫が病じゃなくて福であるからだ。この福がどこから来たのかというと、やはり天からもらったのである。だが劉氏が福としての酒虫を全然意識していなかった、それどころか異国の僧によって虫を取られてしまった。劉氏が宝としての酒虫の価値を見いだせないし、他人の言葉を軽々しく信じて、自分或いは自分の福をしっかり守れない。つまり「天命」の福を失った。

芥川龍之介の「酒虫」には「忍耐」という思想も見られる。蛮僧は「劉の腹に酒虫がいる。いくら飲んでも酔っぱらったことがないのは病の証拠だ。治しに来た」と劉に言った。劉は僧の治療を受けようとし、裸になって細引きでぐるぐる巻きにされ、日向にじっとしていた。酒を入れた素焼の瓶が劉の枕のもとに置かれた。この治療法は「劉の『我慢』『忍耐』の精神を鍛えさせようとするもの」[28]であり、身体から欲望を取る修行でもある。しかし、酒虫とは何か、酒虫がいなくなるとどうなるか、枕もとの酒の瓶は何のつもりか、それを知っているのは、蛮僧しかいない。これに対して芥川は、学校教育についての談義をした。「普通の人間が、学校の教育などをうけるのも、実は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。」という。この部分について、ある論者は次のように見解を示している。「『酒虫』にみられる蛮僧の＜治療＞――勤勉、忍耐の精神、働く人間に鍛え直していく＜治療＞は、

テクスト外部において、国家が国民に課した「強化」「教育」と重なりあっていたのである」[29]という。

（六）「人間はあてにならない」

原作「諸城某甲」の某甲は家族がいる。家人が流寇に斬り殺された某甲の死体を収めた時、まだ生きていることに気づいて、某甲を担いで帰宅した。十余年後、大笑いした時、某甲は頭が落ちて死んだ。笑った者を訴えた某甲の父は金をもらって、某甲を葬った。某甲は首が一筋つながっているだけで死ななかったのに、一笑して死んでしまったというのは、その二三の隣人に、前世で借りがあったからだという。仏教では前世とは衆生が生まれる前に送った一生であり、このような不思議な死に方、または死なせた隣人には定められた運命であることを暗示しているものである。

芥川の「首が落ちた話」の人間関係は原作よりもっと複雑である。そこには何小二と家族との関係がある。何小二は首を斬られた後、父や母の名を呼んで、正気を失っているところに、母親の姿が見えた。また日本兵が登場してきた。何小二は正気を失った時に、人間がみじめな生存を続けていくのは寂しいと考え、「あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と変らないのであろう」と認識した。さらに、彼等が幻でなかったなら、自分は彼等と互に慰め合って、せめて一時でもこの寂しさを忘れたいという敵味方を超えた関係性が示されている。

芥川龍之介は何小二に木村陸軍少佐との接点を構築した。時間設定は「日清両国の間の和が媾ぜられてから、一年ばかりたった」時、北京にある日本公使館内の一室では、日本公使館附武官の木村陸軍少佐と視察に来た農商務省技師の山川理学士とが日清戦争の話をしたとき、木村少佐が山川技師に『神州日報』の記事を見せ、そこで何小二の不思議な出来事が載っていた。その不思議なことについて、木村少佐は「僕はその何小二と云うやつを知っているのだ」と言って、戦場で負傷した何小二が日本軍の野戦病院へ収容され、「極正直な、人の好い人間」であると説明した。また日清戦争の時に勇士だった何小二が戦争後無頼漢と呼ばれ、人間は「あてにならない」と

結論をつけた。このように芥川龍之介は、前出の新聞は言外の意を読むべき論や、寂しさにおいては敵味方がいないといった考え方を、翻案作品の変容を通して文学的メッセージを送り続けたのである。

三、おわりに

芥川龍之介の三つの「中国物」がいずれも彼のその後の中国旅行前の作品である。大正十年三月下旬から七月上旬まで、芥川龍之介が大阪毎日新聞海外視察員として中国に滞在していた。杭州にいた時に、次のように書いた。「私は日本にいる間、この種類の鬼狐の譚も、机上の空想だと思っていた。処が今になって見ると、それはたとい空想にしても、支那の都市や田園の夜景に、然るべき根ざしを持っている」[30]。芥川龍之介は『聊斎志異』を読む際に、実にはあり得ないような事柄を想像する作品だと思ったかもしれない。だが、実際に中国に行ってみると、『聊斎志異』のような怪異談はやはり生まれる土壌や土台がある異国においてそれなりの必然性・社会性があると理解し始めた。

芥川龍之介がずっと注目していたのは「人間の宿命的なはかなさ、弱さであった。その点では『ひとすじ』に近いともいえるであろう」[31]。芥川龍之介が『聊斎志異』を手本に、「鼠戯」、「雨銭」、「酒虫」、「諸城某甲」から示唆を受けて、絶えず自分の生きていた時代に対してある種の政治批判を発していた。中国文化の造詣の深さから芥川龍之介は漢文学からの翻案や影響を自由自在に操っていた。原作と芥川作との比較は中国文化風土と芥川のいる時代の日本の文化風土に対する再認識を図ることにもなる。

注

1　以下の関連研究参照。翁蘇倩卿「日本近代文壇に於ける『聊斎志異』の受容と変容」、陳愛陽「異文化の境目にある『自我意識』―『聊斎志異･黄英』から太宰の『清貧譚』へ」、松田忍「中

国文学と太宰治:『聊斎志異』『黄英』と『清貧譚』」、藤田贤文·王枝忠「《聊斋志异》的一个侧面——关于它和日本文学的关系」、安載鶴「日本近代以来《聊斋志异》的受容及其研究」、王晓平「《聊斋志异》异人幻象在日本短篇小说中的变身」、楊芳靚・李光貞「《聊斋志异》在日本的译介」、郭燕梅「进程与嬗变——《聊斋志异》在日本的翻案」、顔丽蕊「《聊斋志异》日本翻案史评述」。

2 以下の関連研究参照。孔月「芥川龍之介『酒虫』における治療と病の寓意——『聊斎志異』の『酒蟲』との比較をとおして」、陳潮涯「芥川龍之介『首が落ちた話』と『聊斎志異』の『諸城某甲』——継承と変容——」、松野敏之「翻案小説としての芥川龍之介『酒虫』:『聊斎志異』からの改変に関して」、谷川絹「 芥川龙之介的《仙人》与《聊斋志异》」、李艳静「芥川龙之介与《仙人》」、郭艳萍「再论芥川龙之介与《聊斋志异》——关于《酒虫》」、郭昱瑾「芥川龙之介《酒虫》与蒲松龄《酒虫》对比研究」、郭艳萍・斉秀丽「芥川龙之介与《聊斋志异》——关于《落头之谈》」、郭艳萍「芥川龙之介与《聊斋志异》」、侯恺「《聊斋志异》在芥川龙之介怪异小说中的体现」、杜文倩「“鬼才”与“留仙”的跨时空际会——日本作家芥川龙之介的聊斋情结」、席嘉敏「《聊斋志异》在芥川龙之介历史小说“中国物”中的变异研究」。

3 安藤更生「生きている聊斎志異の世界」『中国古典文学全集　月報』第 5 号　平凡社

4 増田渉他訳『中国古典文学全集　第二十二巻　聊斎志異　下』平凡社　昭和 34 年 2 月　450 頁

5 同上

6 许兆真、袁士迎「嬉笑怒骂皆文章——浅淡《聊斋志异》的讽刺艺术」『阅读与写作』1999 年 03 期

7 张智文「《聊斋志异》中人的异化主题及深层意蕴」『文学教育 (上)』2014 年 10 期

8 于天池「论蒲松龄的教育思想与《聊斋志异》的教育精神」『蒲松龄研究』1999 年 02 期

9 杨士钦「《聊斋志异》中的重商意识及其深层意蕴探析」『蒲松龄研究』2022 年 02 期

10 刘敬圻「《聊斋志异》宗教现象读解」『文学评论』1997 年 05 期

11 罗有良「浅谈《聊斋志异》中的宗教色彩」『文学教育（中)』2014 年 08 期

12 李明军「“以物为春”—《聊斋志异》中的动物生态伦理及其人文情怀」『绍兴文理学院学报 』2019 年 04 期

13 増田渉他訳『中国古典文学全集　第二十二巻　聊斎志異　下』の帯の所に書いてある。平凡社　昭和 34 年 2 月

14 増田渉他訳『中国古典文学全集　第二十二巻　聊斎志異　下』平凡社　昭和 34 年 2 月　449 頁

15 安藤更生「生きている聊斎志異の世界」『中国古典文学全集　月報』第 5 号　平凡社

16 芥川龍之介「骨董羹—寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文—」『芥川龍之介全集第四巻』筑摩書房　昭和 49 年 10 月　77、78 頁

17 杜文倩「“鬼才”与“留仙”的跨时空际会——日本作家芥川龙之介的聊斋情结」『中国海洋大学学报 (社会科学版)』2013 年 02 期

18 郭艳萍「芥川龙之介与《聊斋志异》」『日本研究』2007 年 04 期

19 郭昱瑾「芥川龙之介《酒虫》与蒲松龄《酒虫》对比研究」『长江大学学报（社会科学版)』2014 年 12 期

20 席嘉敏「《聊斋志异》在芥川龙之介历史小说“中国物”中的变异研究」『赤峰学院学报（哲学社会科学版)』2021 年 08 期

21 林长华「源远流长的“鼠戏”」『山西日报』2008 年 2 月 1 日

22 「新年看非遗文化表演“鼠戏”」『新民晚报』2023 年 2 月 5 日

23 芥川龍之介「校正後に」『芥川龍之介全集第五巻』筑摩書房　昭和 49 年 10 月　344 頁

24 『日本国語大辞典』第 2 版　小学館　2000 年

25 滕斐窈「芥川龍之介の『聊斎志異』翻案作品における語彙的特徴—『仙人』（1916 年）・『酒虫』

を中心に―」『關西大學中國文學會紀要』巻 40　2019 年 3 月
26　増田渉他訳『中国古典文学全集　第二十二巻　聊斎志異　上』平凡社　昭和 33 年 7 月　156 頁
27　謝肇淛『五雑組 3』岩城秀夫訳　平凡社　1997 年 6 月　177 頁
28　孔月「芥川龍之介『酒虫』における治療と病の寓意――『聊斎志異』の『酒蟲』との比較をとおして」『文学研究論集』巻 27 2009 年 02 月
29　同上
30　芥川龍之介『上海遊記・江南遊記』講談社　2009 年 5 月　80 頁
31　吉田精一「芥川文学の材源」『比較文学研究　芥川龍之介』朝日出版社　昭和五十三年　18 頁

参考文献

1．増田渉他訳『中国古典文学全集　第二十二巻　聊斎志異　上』平凡社　昭和 33 年 7 月
2．増田渉他訳『中国古典文学全集　第二十二巻　聊斎志異　下』平凡社　昭和 34 年 2 月
3．吉田精一、福田陸太郎『比較文学研究　芥川龍之介』朝日出版社　昭和五十三年
4．成瀬哲生「大正四年七月の「仙人」―芥川龍之介と中国文学―」『徳島大学国語国文学』巻 5　1992 年 03 月
5．郭艳萍「芥川龙之介与《聊斋志异》」『日本研究』2007 年 04 期
6．孔月「芥川龍之介『酒虫』における治療と病の寓意――『聊斎志異』の『酒蟲』との比較をとおして」『文学研究論集』巻 27　2009 年 02 月
7．杜文倩「“鬼才”与“留仙”的跨时空际会――日本作家芥川龙之介的聊斋情结」『中国海洋大学学报 (社会科学版)』2013 年 02 期
8．郭昱瑾「芥川龙之介《酒虫》与蒲松龄《酒虫》对比研究」『长江大学学报（社会科学版）』2014 年 12 期
9．陳潮涯「芥川龍之介『首が落ちた話』と『聊斎志異』の『諸城某甲』――継承と変容――」、『待兼山論叢　文学篇』第 52 号　2018 年 12 月
10. 滕斐窈「芥川龍之介の『聊斎志異』翻案作品における語彙的特徴―『仙人』（1916 年）・『酒虫』を中心に―」『關西大學中國文學會紀要』巻 40　2019 年 03 月
11. 席嘉敏「《聊斋志异》在芥川龙之介历史小说“中国物”中的变异研究」『赤峰学院学报（哲学社会科学版)』2021 年 08 期